

青年期における見捨てられ不安と愛着の関連性

The relationship of Abandonment Anxiety and Attachment in adolescence

齋藤 富由起¹、吉森 丹衣子²、守谷 賢二³

要旨

大学生を対象に見捨てられ不安と愛着パターンおよび愛着行動との関連性を検討した結果、「見捨てられ回避」因子とアンビバレント型に相関が見られた。また見捨てられ不安と最も高い相関を示した愛着行動はアンビバレントな「他者への懸念」因子であった。

これまで見捨てられ不安はパーソナリティ障害との関連で強調されてきたが、本研究の結果からは、理解できるストレスフルな青年期心性としても理解できる。今後の課題として、見捨てられ不安の背景要因を追究するとともに、見捨てられ不安に対する集団的なストレスマネジメントプログラムの可能性が議論された。

キーワード：見捨てられ不安 Abandonment Anxiety, 愛着 Attachment
青年期 Adolescence

1. 問題提起

1-1. 見捨てられ不安の構成概念

「見捨てられ不安」(e.g., 吉永, 2007) や「見捨てられ恐怖」(e.g., 黒田, 2006) などと訳される「見捨てられることへのなりふりかまわぬ努力」(frantic efforts to avoid real or imagined abandonment) は、Masterson(1972)の貢献により DSM-IV-TRにおいて境界性パーソナリティ障害 (Borderline Personality Disorder; 以下 BPD と略) の診断基準の一つに設定されている構成概念である (Gunderson, 2001)。Masterson (1972)や Masterson&Rinsley(1975)は、BPDに先立つ概念である「境界例」(Borderline Case)の説明において、その中核は分離個体化期における再接近期 (Mahler, Pine & Bergman, 1975)の不全で生じる「見捨てられ抑うつ (Abandonment Depression)」と指摘した。

Masterson(1972)の学説は、Mhaler & Kaplan(1977)や Foggy(1991)、Gunderson (1996)から批判を受け、再接近期不全だけに直線的な原因を認める見解は少数になったものの、「見捨てられ抑うつ (Abandonment Depression)」という概念の性質は否定されることなく、DSMにおいて「現実には、または想像の中で見捨てられることを避けようとするなりふりかまわぬ努力」(frantic efforts to avoid real or imagined abandonment)として受け継がれ、BPDの診断を構成する要因となっている。

他方、近年ではBPDの連続説と非連続説の議論があり、特にアナログカル研究を重視した連続説の立場からは、比較的健康な群においても(強度や頻度は異なるものの)BPDの諸特性が確認できるのではないかという問いから、境界性パーソナリティ特性あるいは境界性パーソナリティ傾向に関する研究(井沢, 1995; 加倉井, 2005; 齋藤, 2007)が行われている。またBPD全体の連続性だけでなく、中でも特に連続性の強い要因を比較的健康な母集団に確認する研究もおこなわれている。例えば佐々木・小川(1994)は青年期を第2の分離-個体化期と捉え、見捨てられ抑うつを抱きやすい情緒的交流が再活性化されるとした。そして現代社会は価値観が多様であるがゆえに対人関係においても安定した対象と関わる機会が少ないという観点から、現代の青年層は見捨てられ抑うつとい

1 Fuyuki SAITO 千里金蘭大学生生活科学部児童学科 (受理日: 2009年10月1日)

2 Taeko YOSHIMORI 法政大学大学院人間社会研究科

3 Kenji MORIYA 文教大学大学院人間科学研究科

える心理状態や対人関係の問題を抱えやすくなっていると指摘して、「見捨てられ抑うつ尺度」の開発に成功している。

また、BPDの診断基準である「frantic efforts to avoid real or imagined abandonment」に基づく「ほとんど恐慌状態に近い不安」を「見捨てられ恐怖」とするならば、それと相関を持ちながらも、強度ないしは頻度などの諸点で相対的に区別できる青年期心性としての不安を「見捨てられ不安」(abandonment anxiety)と理解することも可能である。こうした立場からは吉森・斎藤(2008)による「見捨てられ不安尺度」が成立している。

以上のように「見捨てられ不安」は比較的健康な群の中でも把握できる青年期心性ないしは境界性パーソナリティ傾向の一要素として理解することができる。しかし、青年期心性としての「見捨てられ不安」は関連する心理的要因も不明である。現在、BPDの診断基準である見捨てられ恐怖との関連性が最も注目されている概念はBowlby(1969)の愛着理論(attachment Theory)に遡れる内的作業モデル(internal working model)および愛着行動である(Gunderson,2007)。そこで次節では、見捨てられ不安と関連する愛着理論について概観したい。

1-2. 見捨てられ不安と愛着理論

Masterson(1972)により見捨てられ抑うつが提唱された当時、その背景にあったのはMaler(1972)による発達理論であった。しかしMahler&Kaplan(1977)は再接近期の不全が見捨てられ抑うつを必ずしも形成しないことを実証的に報告しており、再接近期の不全以外の要因が探索されるようになった。

こうした中で関連性が注目されたのは早期の愛着の不安定性である(Fonagy, 1991; Gunderson, 1996)。Bowlby(1969・1973・1980・1988)によれば、愛着とは、生物学的な適応のための養育者への近接性(Proximity)を背景に、特定の人と人との間に形成される、時間や空間を超えて持続する情緒的な結びつきと定義できる。特に乳児が養育者との間の相互作用を通して形成する愛着が重要であり、この要因がパーソナリティ形成に影響を与えるとされている。愛着の形成においては、愛着関係の継続性、また乳児の愛着行動への反応の一貫性と乳児期における母親との分離体験の累積が愛着の形成に影響を与える。そして、愛着形成には継続性と一貫性がある事が望ましく、分離体験の累積がない方が望ましいと指摘されている(Bowlby, 1973)。

さらにBowlby(1969)は愛着には臨界期があるとし、それをほぼ3歳頃と仮定した。そして、4つの段階を経て愛着は発達・変化すると仮定している。Bowlby(1969)による愛着の発達段階をTable.1に示す。

Table.1 愛着の段階とその内容

段階	内 容
第1段階	人物の認識を伴わない定位と発信(出生から生後8~12週)
第2段階	1人または数人の特定対象に対する定位と発信(12週から6ヶ月)
第3段階	発信および移動による特定対象への近接の維持(6ヶ月~2.3歳まで)
第4段階	目標修正的な協調性形成(3歳前後から)

Bowlby(1969)は愛着の発達段階を第4段階にわけ、愛着関係の形成の中で幼児の中に分離不安が顕在化する段階を第3段階とした。そして、第4段階になると幼児は愛着対象が近くにいないとも、必ず戻ってきて、必要な状況では助けてくれるという主観的な確信をもつようになると考えた。さらに、この様にして形成され発達していく愛着は、乳幼児期の養育者との関係だけでなく、内在化された後の対人関係一般のモデルとして機能すると考え、これを内的作業モデル(internal working model)と呼んだ。こうした内的作業モデルに基づきAinsworth(1978)が愛着関係のパターンを「安定型」「両価型」「回避型」の3類型にまとめたことは周知の通りである。日本では戸田(1989)が内的作業モデル尺度を作成しており、保護者の養育態度の関連性が検討されている(戸田, 1997)。

Table.2に戸田（1989）による愛着パターンの類型を示す。

Table.2 愛着パターンの類型

型	他者表象	自己表象
安定型	応答的	援助される価値のある存在
回避型	否定的かつ援助が期待できない	自己充足的な存在である
アンビバレント型	信頼と不信のアンビバレントな表象	自己不全感

こうした愛着パターンがBPDとの関連において注目されたのは、主として1990年代の臨床的発達心理学の発展に依拠している。例えばMain&Solomon(1990)は、愛着パターンに依存欲求の否認や愛着されることに対する恐怖からなる無秩序／無方向型を見出した。両価型と無秩序／無方向型は相互移行が認められ、BPD特有の反応を説明する概念として注目された。こうした愛着パターンは養育者が抑うつ的であったり、虐待傾向を有することで発現しやすく（e.g., Main&Hesse, 1990）、さらにBPD患者の養育者はこうした属性がよく認められることが報告されており（Gunderson&Zanarini, 1989; Links, 1990）、愛着パターンの相互移行性をBPDの中核的病理ととらえる臨床科学者も多数存在する（Gunderson, 2001）。以上の研究を踏まえると、比較的健康的な母集団を対象にした「見捨てられ不安」も、それが見捨てられ恐怖との連続性を持つならば、愛着パターンとの相関があるとの仮説が立てられる。ただし母集団の性質の違いから「見捨てられ恐怖」と同様の高い相関があるとは考えづらく、中程度または部分的な相関にとどまると思われる。

愛着行動とは、特定の個人に対して接近しよう、または接近を維持しようとする場合に示される行動形態と言える（Bowlby, 1981）。こうした定義からわかるように、愛着行動は重要な他者との関係性を維持するための行動であり、見捨てられ不安が強い者が重要な他者から見捨てられないため、その関係を維持するためにとる行動との関連性が考えられる。以上の理由から、本研究では見捨てられ不安と愛着パターンおよび愛着行動との関連性を検討したい。

2. 目的

本研究の目的はBPDの診断基準である「見捨てられ恐怖」と愛着パターンの関連性を前提に、「見捨てられ不安」と愛着パターンおよび愛着行動の関係を検証することである。

3. 研究1 見捨てられ不安と愛着パターンの関連性

3-1. 方法

3-1-1. 調査協力者

大学生173名(平均年齢19.83歳, $SD=1.68$)であった。

3-1-2. 使用した尺度

1) 見捨てられ不安尺度

吉森・斎藤（2008）によって作成された尺度であり、「見捨てられるのが怖くて、相手が望むような人間として振舞ってしまう」「嫌われるのが怖くて、良い子を演じてしまう」などの19項目からなる「見捨てられ不安」因子と「友人の中では本当の自分ではない」「友人と話していても心から打ち解けない」などの13項目からなる「否定的対人認知」の2因子からなる。本尺度は「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5件法で測定された。

2) 内的作業モデル尺度

戸田(1988)によって作成された尺度である。この尺度では、調査協力者の内的作業モデルは安定型・回避型・アンビバレント型の3つの型に分類される。本尺度は「非常によくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの6件法で測定された。

4. 研究1－結果

見捨てられ不安と内的作業モデルの関連性を検討するために相関係数を算出した。その結果を Table.3に示す。

Table.3 見捨てられ不安と愛着パターンの相関

	安定型	回避型	アンビバレント型
見捨てられ不安【全体】	-.098	-.050	.115
見捨てられ回避	-.197(**)	.134	.643(**)
否定的対人認知	-.063	-.077	.004

** $p < .01$

見捨てられ不安（全体）および「否定的対人認知」因子と愛着パターンの間に有意な相関を得ることはできなかった。「見捨てられ回避」因子とアンビバレント型との間に $r = .643 (p < .01)$ とやや高い相関係数が見出された。また安定型との間に $-.197 (p < .01)$ と低い負の相関が得られた。

5. 研究1－考察

見捨てられ回避因子においてアンビバレント型と正の相関が得られ、安定型とは弱い負の相関が得られた。この結果から、見捨てられることを恐れて回避行動をとる場合、その背景には他者への信頼と不信という両面的な表象と同時に自己不全感が個人の存在が指摘できる。このことは安定型との弱い負の相関とも整合性を持つ。また反映しており、アンビバレント型と正の相関が得られたことから、見捨てられ不安においては、養育者との関係に、安定した愛着関係が築かれていないことが推測できる。

今回、否定的対人認知因子とアンビバレント型に相関が見られなかった理由としては、否定的対人認知はその命名が示すように「ネガティブな対人認知」という一方向の価値観で成立しており、両面的な内容ではない点が指摘できる。また、内的作業モデル尺度が前提とする回避尺度は「私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやっていけると思う」という項目に示されるように、自己充足的な自己表象を示している。一方、否定的対人認知は「他人は私に期待していない」「結局、味方になってくれる人はいない」という項目に示されるように自己充足的な内容ではなく、ネガティブな自己表象が推測されるため、回避型との相関は成立しづらかったと考えられる。今後、無秩序／無方向型との関連性の検討が望まれる。

6. 研究2 見捨てられ不安と愛着行動との関連性

6-1. 方法

6-1-1. 調査協力者

女子大学生195名(平均年齢18.75・ $SD=2.20$)であった。

6-1-2. 使用した尺度

1) 見捨てられ不安尺度

研究1と同様に、吉森・斎藤(2008)によって作成された尺度を使用した。

2) 成人愛着行動尺度(AABS: Adult Attachment Behaviors Scale)

中尾・加藤(2006)によって作成された4因子21項目からなる尺度である。因子構造は「すねた伝達」、「他者への懸念」、「近接性維持」、「素直な伝達」の4因子となっている。Table.4に因子内容の詳細を示す。

Table. 4 成人愛着行動

因子名	内 容
すねた伝達	自分の期待と異なった反応を他者がするため、すねた素振りを見せることによって相手の反応を引き出す愛着行動である。この愛着行動には甘え的要素が含まれる。
他者への懸念	他者に自分の本心を知られたくないが、素直に気持ちを伝えたい思いもあるため、気持ちの伝達を抑制しながら行う愛着行動である。
近接性維持	他者との近接性を維持しようとする愛着行動。
素直な伝達	自分の感情や出来事を率直に表現する愛着行動。

7. 研究 2－結果

見捨てられ不安と愛着行動についての調査を行った結果、全ての因子と有意な相関が得られた。以上の結果を Table.5に示す。

Table.5 見捨てられ不安と愛着行動との相関

	すねた伝達	他者への懸念	近接性維持	素直な伝達
見捨てられ不安	.352(**)	.484(**)	.219(**)	.068

** $p < .01$

8. 研究 2－考察

本調査の結果、見捨てられ不安と「すねた伝達」、「近接性維持」「他者への懸念」との間に正の相関が見られた。最も相関の高かった「他者への懸念」は両価的な愛着行動であり、「素直な伝達」との関連性が無相関であったことと整合性を持つ。

愛着行動はコミュニケーションのあり方を意味するが、「近接性維持」と低い相関を持つことから、見捨てられ不安の高い者は自己充足的な目的で対人関係を意図的に回避しているわけではないと考えられる。「他者への懸念」との相関に見られるように両価的な認知と感情を基本に、時に「すねた伝達」を行いながら、人間関係そのものは希求していると示唆される。

比較的健康な母集団では「見捨てられ不安」は「他者への懸念」との相関に見られる両価的な認知・行動・情動によって最も特徴づけられる。両価的であるがゆえに、見捨てられ不安の高さは対人関係の不安定さを間接的に意味するが、他方で、両価性そのものは青年期の了解できる心理的特性とも考えられる。本研究の結果から見出された相関係数の高さから、見捨てられ不安の高さが直接的に病理性の深さを意味しないことが理解できる。

このように考えると、青年期の対人関係における集団的ストレスマネジメントの一領域として見捨てられ不安の高さに対するコーピングが開発されてもよいだろう。それは否定的対人認知や見捨てられ回避行動の変容を中心とした両価的な認知・行動・情動へのマネジメントと言える。すでに BPD における両価性への対応としては、弁証法的行動療法を始めとした集団的ソーシャルスキルトレーニングも開発されている (Linehan, 1993)。今後は、こうした先行研究を参考に、パーソナリティ障害の認知行動変容だけでなく、より一般的な層を対象とした見捨てられ不安へのソーシャルスキルトレーニングやセルフヘルプ・プログラムの開発も課題となるだろう。

最後に、現代の青年層になぜ見捨てられ不安が確認されるのかという背景要因についても不明な点が多い。小川・佐々木 (1994) が青年期を第二の分離－固体化期とみなして見捨てられ抑うつが強まる背景を指摘したように、見捨てられ不安 (吉森・斎藤, 2008) においてもその背景論を追究することが望まれる。

引用文献

Ainsworth MDS, Blehar MC, Waters E, et al. 1978 Patterns of Attachment-A Psychological Study of the Strange Situation-, Hillsdale, NJ, Erlbaum.

Bowlby J. 1969 Attachment and Loss, 1 Attachment, New York, Basic Books.

Bowlby J. 1973 Attachment and Loss, 2 Separation Anxiety and Anger, New York, Basic Books.

Bowlby J. 1980 Attachment and Loss, 3 Loss, New York, Basic Books.

Bowlby J. 1988 A Secure Base Parent-Child Attachment and Healthy Human Development, New York, Basic Books.

Fonagy P. 1991 Thinking about thinking-some clinical and theoretical considerations in the treatment of a borderline patient- Int J Psychoanal 72, 4, 639-656.

ジェロルド・クライスマン ハル・ストラウス著 吉永陽子訳 2007 BPD (境界性パーソナリティ障害) を生きる七つの物語 星和書店.

Gunderson, JG. 1996 The borderline patient's intolerance of aloneness-insecure attachments and therapist availability- Am J Psychiatry 153 6 752-758.

Gunderson, J. 2001 Borderline Personality Disorder A Clinical Guide. John Scott & Company (黒田章史 訳 2007 境界性パーソナリティ障害 クリニカルガイド 金剛出版) .

Gunderson JG., Zanarini MC. 1989 Pathogenesis of borderline personality disorder, in American Psychiatric Press Review of Psychiatry, 8, Edited by Tasman A, Hales RE, Frances AJ. Washington, DC, American Psychiatric Press, 25-48.

加来華誉子・斎藤富由起・守谷賢二・末武康弘 2005 境界性人格障害への定量的アプローチの展望と課題 法政大学学生相談室報告紀要, 2, 17-30.

Linehan, M. 1993 Skills Training Manual for Borderline Personality Disorder. Guilford.

Links PS ed. 1990 Family Environment and Borderline Personality Disorder. Washington, DC, American Psychiatric Press.

Main M., Hesse, E. 1990 Parents' unresolved traumatic experiences are related to infant disorganization status-is frightened and/or frightening parental behavior the linking mechanism? in Attachment in the Preschool Years. Edited by Greenberg MT, Cicchetti D, Cummings EM. Chicago, University of Chicago Press 161-184.

Main M., Solomon ,J. 1990 Procedures for identifying infants as deisorganized/disoriented during the Ainsworth Strange Situation, in Attachment in the Preschool Years. Edited by Greenberg MT,Cicchetti D,Cummings EM.Chicago,University of Chicago Press 121-160.

Mahler,M., Pine,F and Bergman,A. 1975 The Psychological Birth of the Human infant.Basic Books,NewYork.

Masterson,J. 1972 Treatment of Borderline Adolescent.A Developmental Approach.NewYork,Wiley.

Masterson,J,Rinsley,DB 1975 The borderline syndrome:the role of the mother in the genesis and psychic structure of the borderline personality.Int J psychoanal,52,163-177.

中尾達馬 加藤和生 2006 成人愛着スタイルは成人の愛着行動パターンの違いを本当に反映しているのか？パーソナリティ研究, 14, 281-292.

斎藤富由起 2007 境界性パーソナリティ特性尺度開発の試み 千里金蘭大学紀要, 4, 65-72.

佐々木裕子・小川俊樹 1994 「見捨てられ抑うつ」尺度の作成とその検討 筑波大学心理学研究, 16, 243-254.

戸田弘二 1988青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル：作業仮説（working models）からの検討 日本心理学会第52回大会発表論文集, 27.

吉森丹衣子・斎藤富由起 2008 見捨てられ不安尺度の開発 子ども学研究, 1, 138-162.